

セラミック九州

佐賀県立九州陶磁文化館報

No.35

発行 1999.3.31

編集 佐賀県立九州陶磁文化館

代表者 樋渡昭範

佐賀県西松浦郡有田町中部乙3100番地1

〒844-8585 TEL.0955-43-3681 FAX.0955-43-3324

印刷所 山口印刷株式会社・伊万里市



いろえたけとらもんおおざら あおて
色絵竹虎文大皿(青手) 館蔵資料

肥前・有田窯

1650～60年代

口径 31.5 高さ 7.2

高台径 16.5

有田で焼かれた初期色絵には、上絵の緑・青・黄で全面を文様で埋め尽くす「青手」がある。この大皿は1650～60年代に焼かれたもので、成形や焼成の技術が向上したため、薄手で軽く、上絵付の発色がよい。皿の口縁部をやや立ち上げ黄色の花文で埋め、額縁の役割を果たす。見込は緑で竹の地文が主文の虎の黄色をひきたてる。口鏽を施し、裏は上絵黒の線描で描いた菊唐草文の上に緑を重ねている。高台内にはこれも上絵の黒で二重角「福」字銘を書く。

特別企画展のお知らせ

「柿右衛門—その様式の全容—」展

○趣 旨 延宝期（1673～1680年）に成立する柿右衛門様式は、乳白色の素地に黒線を用いて線描きをし、赤、青、緑、黄などで彩色した絵画的な構図のものに特徴があります。この柿右衛門様式は日本のやきものを代表する優美な様式のひとつとして内外に知られています。しかし、典型作品といえる濁手の色絵の他、染付だけの作品や染付と色絵を併用した作品なども含める考え方もあり、現状では「柿右衛門様式」に確固とした定義がないのが実状です。また、酒井田家各世代の作品変遷についても正しく認識されているわけではありません。

当展は、平成7～10年度に実施した酒井田柿右衛門家伝来の土型と柿右衛門古窯跡出土陶片の調査から、「柿右衛門様式」の全容を総合的に明らかにしようと試みるものです。

○主 催 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 場 佐賀県立九州陶磁文化館

○会 期 平成11年10月8日(金)～11月14日(日)

○展示内容 江戸時代の柿右衛門様式の典型作品及び参考作品、関連する陶片、土型など約300件。



色絵唐獅子牡丹文十角皿 肥前・有田窯（南川原山）
1670～90年代



色絵松竹梅文輪花皿 肥前・有田窯（南川原山）
1680～1700年代



色絵花鳥文六角壺 肥前・有田窯（南川原山）
1680～90年代



色絵婦人像 肥前・有田窯 1680～1700年代

新収蔵品展のお知らせ

「新収蔵品展」

- 期 間 6月1日(火)～27日(日)
 第1期：6月1日～13日
 第2期：6月15日～27日
- 内 容 今回は、平成9・10年度の2カ年に寄贈
 いただいた作品及び、当館が購入した作品
 を展示します。展示作品は、唐津焼、古伊
 万里のほか九州各県の陶磁器、現代作品な
 ど約100点程度を展示します。
- 場 所 第1展示室



色絵花鶴文輪花皿 肥前・有田 1670～80年代

ミニ企画展のお知らせ

今年度は4回のミニ企画展を予定しています。

第1回テーマ展 「そば猪口展」

- 期 間 7月6日(火)～8月1日(日)
- 内 容 館蔵品の中から江戸時代のものを中心に
 そば猪口を集めて展示します。
- 場 所 第1展示室



色絵唐花文猪口 肥前・有田 1710～40年代

第2回テーマ展 「茶陶展」

- 期 間 8月10日(火)～9月26日(日)
- 内 容 館蔵品の中からお茶道具に関する江戸時
 代を中心とした作品を集め展示します。
- 場 所 第1展示室



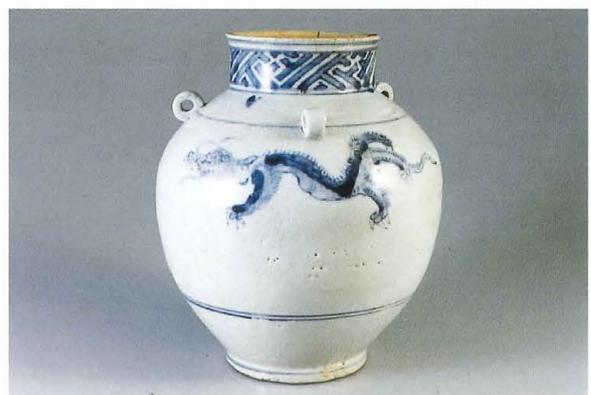
朝鮮唐津茶碗 銘「橋立」 松浦系古唐津 17世紀後半

第3回テーマ展 「陶芸教室OB会展」

- 期 間 11月30日(日)～12月26日(日)
- 内 容 当館ではこれまでに33回の陶芸教室を開
 きました。今回の展示は、これまでに陶芸
 教室を終了された有志の方々の作品展で
 す。
- 場 所 第1展示室

第4回テーマ展 「干支・龍文様展」

- 期 間 1月11日(火)～23日(日)
- 内 容 館蔵品の中から干支にちなんだ龍の文様
 のある江戸時代の作品を中心に展示しま
 す。
- 場 所 第1展示室



染付雲龍文三耳付壺 肥前・有田 1620～40年代

開館20周年記念「古伊万里の道」展調査報告

吉永陽三

樋渡昭範館長、吉永陽三学芸課長、藤原友子学芸員の3名は、平成9年9月16日(水)から9月27日(日)まで、「古伊万里の道」展調査及び出品可能性調査のためオランダへ出張しました。

1 マウリッツハイス美術館 (ハーグ市)

中国の陶磁器が描かれた油彩の静物画がありました。

2 メスタック美術館 (ハーグ市)

有田町陶磁美術館所蔵と酷似した「染付有田職人尽図大皿」が展示してありました。

3 ハーグ国立古文書館 (ハーグ市)

長崎オランダ商館日誌の原本がありました。有田焼の輸入実績を記しています。

4 アムステルダム歴史博物館 (アムステルダム市)

オランダ東インド会社関連資料(当時の世界地図や海図、オランダ船を描いた油絵、VOCの倉庫模型と倉庫に収蔵される輸出品模型、銀食器、沈没船の引き上げ品)などがありました。

5 アムステルダム考古局

アムステルダム市内の出土陶磁(中国・日本・ヨーロッパ)が展示してありました。

6 フロニンゲン博物館 (フロニンゲン市)

展示中及び収蔵庫の輸出古万里・中国陶磁器・デルフト陶器約170点ほどを調査しました。

西暦2,000年の4、5月から2か月間にフロニンゲン博物館では「オランダの古伊万里の名品150選展」を開催するそうです。その150点は九陶に出品が可能だそうです。

VOCの沈没船として知られるものに、

- a ヴィッテ・レーウ号 (Witte Leeuw) 1613年沈没
 - b ハッチャー号 (Hatcher) 1645年頃沈没
 - c ヴーフ・タウ号 (Vuug Tau) 1690年頃沈没
 - d ヘルダーマルセン号 (Geldermalsen) 1752年沈没
 - e ダイアナ号 (イギリス船・Diana) 1820年沈没
- などがあるそうですが、それをテーマに「VOCの沈没船とやきもの展」を将来、日本国内で巡回したいとの希望を告げられました。

7 プリンセスホフ博物館 (レーウワルデン市)

展示中及び収蔵庫の輸出古万里・中国陶磁器・デルフト陶器約120点ほどを調査しました。

8 アムステルダム国立博物館 (アムステルダム市)

展示中及び収蔵庫の輸出古万里・中国陶磁器・デルフト陶器約200点ほどを調査しました。

コルネリス・ブロンク画の皿注文用のデザインの原画、焼物を描いた名画、VOCの船を描いた名画などもありました。学芸員のフィツキ氏は九陶に2か月ほど滞在経験があり、日本語も上手で、調査に対して献身的に対応してくれました。

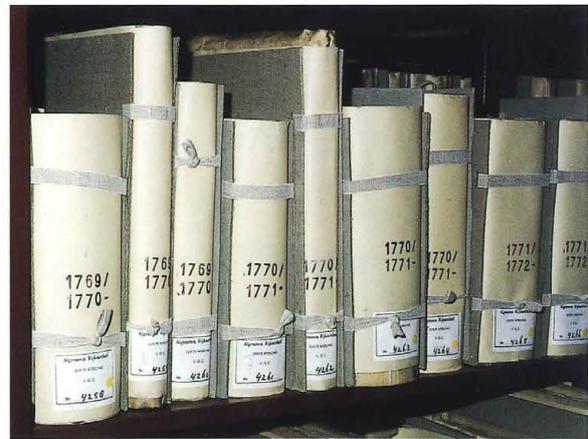
西暦2000年はアムステルダム国立博物館の創立200年にあたり、2000年秋にマイセン焼や柿右衛門や有田焼の展覧会を計画しているそうです。

9 アムステルダム国立海洋博物館 (アムステルダム市)

出品可能な資料を選別しておいてくれていて、船模型、航海日誌、羅針盤、海図、コンパス・水深測量具などを調査しました。

そのほか、ライデン市にあるオランダ国立民俗学博物館や、アムステルダム市内にあるVOC関連建築物等も視察しました。

各館ともに友好的で、調査は順調に行うことができました。(学芸課長)



ハーグ国立古文書館にて



樋渡館長とメノ・フィツキ学芸員

第9回 九州近世陶磁学会

平成11年2月20日～21日に、第9回九州近世陶磁学会が開催されました。同学会は、平成2年12月に開催された九州近世陶磁研究会を前身とし、九州の陶磁器の研究発表の場として回数を重ねています。第6回大会より現在の名前に改称し、会員制の学会となりました。近年は会員数も増加し、九州陶磁に関する情報交換がますます活発に行われています。

今回の大会は、「江戸中・後期における九州・山口地方の陶器一窯跡資料を中心とした」とし、前回の研究テーマが江戸前期であったのに引き続き、江戸中・後期に焦点をあてた発表が行われました。

まず、2月20日13:20より、「滋賀県を中心とした江戸中・後期の陶器窯」と題した稲垣正宏氏（財団法人 滋賀県文化財保護協会）による発表が行われました。稲垣氏の発表は滋賀県の陶器（膳所焼、信楽焼など）を産出した窯を6基あげ、その規模とそれぞれの製品及び窯道具をまとめたものでした。見事に整理された内容で、それぞれの窯についてわかりやすく対比されており、充実した内容の発表でした。



討論会風景

さらに、2月20日には、内田律雄氏（島根県埋蔵文化財センター）による「島根県における江戸中・後期の陶器窯」、西岡義貴氏（山口県教育委員会）による「山口県における江戸中・後期の陶器窯－萩焼古窯跡群発掘調査の成果－」、日高正幸氏（小石原村教育委員会）による「福岡県小石原村古窯跡群について」、梶原慎二氏（嬉野町教育委員会）による「佐賀県嬉野町の陶器窯－18世紀を中心とした－」、などの発表が行われ、第2日目の21日には、盛峰雄氏（伊万里市教育委員会）による「肥前の京焼風陶器について」、坂本重義氏（南関町教育委員会）による「瀬上窯跡の発掘調査について」、池畑耕一氏（鹿児島県立埋蔵文化財センター）による「鹿児島県堂平窯について」、島弘氏（那覇市教育委員会）による「18・19世紀における沖縄県壺屋－壺屋古窯跡群の発掘調査を中心として－」、中島直幸氏（唐津市近代図書館）による「佐賀県唐津

市の献上唐津陶器」などの発表が行われ、過去最多の発表数でした。

恒例となっている各地の出土陶片を持ち寄った出土遺物の検討会では、大橋康二氏（佐賀県文化財課副課長）による解説を、熱心にメモをとっている姿が多く見られました。最後を締めくくる討論会では、各地の窯構造の問題や陶器の変遷の問題などについて活発な意見交換が交わされました。

また、2月20日に開催された総会では、来年に控えた第10回大会を記念する活動についての提案がされました。「九州陶磁の編年」と題した記念誌の刊行と、大会に合わせて「陶片で知る肥前陶磁の変遷」展を当館第一展示室で開催することが賛成多数で可決されました。

平成10年度 陶芸文化講座

平成11年1月17日、31日には陶芸文化講座を開催しました。この講座は、昨年度好評をいただいた当館学芸課長吉永陽三による「名品に触って観る」を再び開催したものです。昨年度は一回の講座であったものを、受講希望者が多数であったことから、本年度は二回の開催としました。

本講座の趣旨は、九州陶磁文化館の収蔵作品12点を実際に手にとって鑑賞していただくというもので、古陶磁を拝見する際の注意や取り扱い方を含めた講義内容となっています。鑑賞作品は、古唐津、初期伊万里、初期色絵作品、柿右衛門様式作品、元禄様式作品、鍋島藩窯様式作品から、2点ずつ選んだもので、それぞれの製作年代、生産地、特徴などを吉永課長が解説しました。

一講座につき20名の定員でしたが、その数を約2倍上回る応募があり、厳正な抽選により参加者が決定されました。受講者の方々は、いずれも熱心な鑑賞態度で、指導に立ち会っていた学芸員に多くの質問を投げかけ、また、お互いに見た感想を述べ合い活気ある講座内容となりました。



熱心に作品を鑑賞する受講者

寄贈記念展

「柴田コレクションVI」

—江戸の技術と装飾技法—

平成10年7月28日(火)から9月6日(日)まで、柴田御夫妻による新たな寄贈品を公開するための展覧会が開かれました。7月28日の開会式には柴田明彦氏、柴田祐子氏御夫妻とも出席され、多くの出席者の見守るなかで式典が行われました。36日間の会期中には9,348人が訪れています。展示された寄贈品は424件879点、その他参考品として80件83点を展示しました。



柴田夫妻らによるテープカット

今回の寄贈展は、柴田コレクションの御披露目展としては第6回目になります。第1回目の寄贈は平成2年に行われ、この御披露目は平成2年と3年の2回に分けて行われました。その後も寄贈が続き、そのつど寄贈展が開かれてきました。パートIV展からはテーマに従って図録の編集や展覧会が企画され、単なる御披露目展とは異なり、企画展に近い内容となりました。今回のパートVI展は江戸時代における有田磁器の技術と装飾技法を明らかにしようとしたものです。それまでの展覧会が全て制作年代を基本に並べてきたのに対し、パートVI展では制作工程を軸にして構成しました。



「成形」コーナーの展示

コーナーは(1)成形、(2)下絵付、(3)施釉・窯詰め、(4)上絵付、(5)同一器形の意匠、(6)構図の技法、(7)異素材加飾に分かれています。これらのコーナーは技法ごとに細分され、その種類は71項目にもなりました。江戸時代の有田焼の技法のほとんどが、この展覧会で紹介されたこととなります。装飾技法などを説明するのに、解説文や写真パネルを添えることの他に、注目すべきポイントには陶磁器に矢印や短い文をシールにして直接貼る試みも行ってみました。展示品を掲載した312頁の図録は、技法を知る辞典的な構成となっています。この点が今までの図録と大きく異なっています。

平成10年度特別企画展

「沖縄のやきもの」

—南海からの香り—

平成10年9月11日(金)から10月25日(日)まで平成10年度の特別企画展として「沖縄のやきもの」展が開催されました。当館では九州各県のやきもの展をシリーズとして開催していますが、今度の展覧会は昭和63年の「長崎の陶磁」展、平成4年の「福岡の陶磁」展に続くものです。会期中には8,923人の来館者があり、沖縄のやきものを体系的に紹介した展覧会として注目されました。当展には津波古聰氏をはじめ、沖縄県立博物館の方々や沖縄県の多くの関係者の御協力をいただきました。



酒井田柿右衛門氏による開会式の祝辞

展覧会は「喜名・知花焼」「湧田焼」「壺屋」「古我知焼」「宮古式土器」「八重山焼」「パナリ焼」に分けて展示され、古窯跡の出土陶片244点を加えて503点が並びました。伝世品のなかでは壺屋焼が最も多く、199点が展示されました。沖縄のやきものをこれほど大規模に総合的に展示した展覧会は地元沖縄でもほとんどないらしく、沖縄から展覧会を見に来た方も多くおられました。

展覧会の準備を進める段階では従来言われてきた制作年代や生産地の判定に曖昧な点がいくつかあり、当館の見解を示すについての苦労がありました。図録は伝世品と出土陶片ともに表と裏面の写真が全て掲載され、202頁の充実した資料集となりました。

展示の工夫としては、沖縄の文化や生活を広く紹介するため、やきものの生産地に対応した着物を展示したり、料理や酒、信仰などに関するパネルを設けました。これにより沖縄の独特のやきものが、どのような生活文化から産み出されてきたかを伝えることができました。会期中には琉球大学教授の金城須美子先生により「沖縄の食事文化」についての講演がありました。



喜名・知花焼のコーナー



金城須美子先生による記念講演

展覧会

「磁器の技と美」

—有田そして瀬戸へ—

平成10年10月31日(土)から12月20日(日)まで「磁器の技と美」展が開催されました。当展は愛知県陶磁資料館と瀬戸市歴史民俗資料館によって編集され、愛知県陶磁資料館・当館・大阪市立博物館・神奈川県立歴史博物館を巡回する展覧会です。当館は第2番目の会場として開催されましたが、開会式には当展の実行委員長である瀬戸市助役の水野純氏、共催の朝日新聞社

の代表者などが出席されました。会期中に12,855人が来館し好評の内に終了しました。特に有田の人々にとっては、幕末明治の瀬戸焼の素晴らしさが驚きであったようです。展示件数は123件でした。



水野実行委員長や樋渡館長によるテープカット

展覧会の特徴は、肥前で始まった磁器生産の技術が、徐々に東方に伝わり瀬戸で発展する過程を追ったことです。特に幕末から近代にかけての作品が充実していました。取り上げられた窯場は、有田・大川内(鍋島藩窯)・三川内・波佐見・亀山・須恵など九州各窯のほか、姫谷・京都・三田・瑞之・偕楽園・湖東などの近畿圏、瀬戸、九谷、東京などの産地の作品が紹介されました。

展示コーナーは五つに分かれ、「肥前磁器の展開」では有田を中心とする江戸時代の作品、「製磁技術の拡がり」では江戸後期の京焼や九谷焼の作品、「瀬戸染付磁器の隆盛」では江戸後期の瀬戸焼の作品、「輸出磁器の展開」では有田焼や瀬戸焼、九谷焼あるいは東京産の作品、「近代陶芸への道」では有田や瀬戸や京都、東京などの陶芸家による作品が展示されました。今回の展示では大型の花瓶やテーブルがありましたので、一部は露出の展示をしました。また磁器を漆で装飾した作品があったため、展示ケースの中に調湿剤を入れて湿度を一定に保つ処置を行いました。



大型の壺やテーブルの展示

シリーズ

やきものの技法 (30)

きんぎんあかさい
金銀赤彩

江戸時代の有田の色絵において、金と銀と赤の3色による上絵付がみられる。この配色は1650年代から60年代に集中しており、他の年代にはみられない特殊な上絵付である。3色を基本とするが、金と銀、あるいは金と赤のように2色で表わされることも多い。また白磁のみならず染付や青磁釉、瑠璃釉、銹釉などの上からも彩色される。

有田磁器における上絵付は1640年代に始まるのを定説とするが、金銀彩はやや遅れて1650年代と考えられている。柿右衛門家に伝わる赤絵の始まりを記した古文書『寛』によれば、金銀絵付の法も酒井田喜左衛門(初代柿右衛門)が始めたことになっている。その時期については、丹州様(2代鍋島藩主光茂)が始めて佐賀へ入部(入国)した年の解釈によって、万治元年(1658)と承応元年(1652)の説に分かれる。近年鍋島報効会によって公開された資料で、明暦3年(1657)に没した初代藩主鍋島勝茂の道具とされる有田焼の茶碗と天目台に、金彩が使われていたことから、1657年以前に少なくとも金彩は行われていたと言える。



色絵栗梅花文皿

有田 1650~70年代 柴田夫妻コレクション

有田磁器の金銀赤彩の特徴は、赤が漆の赤のような光沢があることである。この独特の赤は、通常の赤が線書きと面を塗るダミによって表わされるのに対して、ほとんど線だけの表現である。また描かれた銀彩は通常は酸化して黒く変色している。銀の変色は金銀赤彩の流行が下火になる要因ではないだろうか。写真の七寸皿は非常に白い素地に金銀赤をほどこしたもので、如意頭窓が赤線、如意頭内の梅花文と栗文の一部が金彩、他はすべて銀彩で描かれている。

(鈴田由紀夫)

シリーズ

やきものにみる文様 (30)

松文様

日本には松の文様は多く、若松や浜松、松竹梅、松に鶴、松に富士、根引きの松などその表され方にはさまざまなものがある。このような植物文様は、植物のその姿に美しさを見いだただけでなく、生命力や再生力に、神的なものを感じたからであろう。とりわけ、日本には古来から、松は神霊がやどるものとの信仰があった。その代表的なあらわれが、正月の門松であろう。神仏が松に降臨するという信仰によるものである。

松は、常緑であることから、長寿や不変の愛情の象徴として語られ、めでたいものとされる。これは文学では古くから定着しており、和歌では「住江(すみのえ)の松」は長寿をあらわし、「高砂(たかさご)の松」や「末の松山」は変わらぬ愛情をあらわしている。

また、若松や根引きの松は、松の成長の早さや強い生命力にあやかりたいという願いがこめられている。これらの意匠は肥前磁器にはよくみられる。とくに根引きの松は鍋島藩窯のあった伊万里大川内の製品に、現在でもよく見られる意匠である。

松竹梅が環状にあらわされる意匠は、肥前磁器の皿や猪口などの見込にさかんにほどこされた。この文様は粗製のものではくずされてしまい、松竹梅であることがわかりにくいものも多い。松竹梅も縁起のよいものとして吉祥の文様である。これは酷寒に耐えてなお青い松と竹、春一番に咲く梅を高潔なものとした中国の歳寒三友の思想が日本にもたらされたものである。

(藤原友子)



色絵松竹梅窓絵山水文輪花皿

有田 1740~60年代 柴田夫妻コレクション

利用案内

開館	9:00~16:30 月曜休館
観覧料	無料(特別企画展は、その都度定めます。)
交通	J R九州 佐世保線有田駅下車徒歩約10分